

労協連だより

いよいよである。10回目となる協同集会在、どんな到達点を示すのか。準備に携わってきた一員としても、ハラハラドキドキのカウントダウンである。

この集会の準備が佳境に入ったため、前号では「たより」を休ませていただいた。その償いの意味からも、きわめて高い水準での成功へと緊張は高まる。現況は、参加見込みは初日1,000名を超えたところで、まだまだである。しかし、1,000名が確定し「まだまだ」と言わざるを得ないのが、今回の協同集会。最低でもあと300～500名の参加を、と追いつきの毎日である。キャストイングは万全。参加見込みはもう数歩。当日の運営の準備が本番といった具合だ。一方で、この間の私の取り組みの焦点は、「集会后」の種まきであり水まきである。9月16日、報告者や実行委員のメンバーらが呼びかけた「協同を拓く伊那谷懇話会」には、30数名が駆けつけ、熱心な情報交換を行った。その熱は集会への結集にとどまらず、上伊那地域での分野や立場を超えた、まさしく21世紀型のネットワークづくりへと、夢を広げた。その夢の中心課題に「労協・高齢協の拠点と仕事づくり」を据え、ネットワーク化のスタートが切れたと思う。「ファーマーズマーケット」のはしりともいえる「産直市場・グリーンファーム」を一つの核としながら、食と健康（介護予防）をテーマにした仕事おこしを、今後具体的な検討課題にあげる予定だ。この伊那谷での取り組みに勢いを得て、中信・松本の地にも同様の働きかけを行っている。

古村伸宏（日本労協連・事務局長）
こちらは集会後に動き始めるよう仕かけているが、なかなか多彩な顔ぶれが共感してくれ、上伊那とは違った展開に期待が膨らむ。とくに、「新しい公共」分科会での報告をお願いしていた長野県NPOセンターの市川さんが、松本市収入役に就任！。また、松本に拠点を置く県の若者の就労支援施設・ジョブカフェ信州の新津所長は、古くからの労協運動の理解者であり、若者の仕事おこしで共同の取り組みを模索中である。その他、ヘルパー講座などで関係をつくってきた松本大学や、「福祉の公民館」という珍しいコンセプトで、市が旗を振って展開中の住民自治型福祉づくり拠点「福祉ひろば」など、ネットワーク化とその後の仕事おこしの夢は、無限に広がる可能性を持っている。こうした「集会后」も見据えた具体的な地域でのアプローチは、きっと新しい運動の水準を拓き、より強固で柔軟な協同労働を無数に育て上げていこう。労協連合会のこれからの機能・役割と、協同総研の機能・役割は、こうした取り組みの中に大きなヒントがあるように感じる。

公共サービスの民営化をはじめとする行財政改革は、いっそう荒々しく進行している。そんな中で、ある自治体と組んで、厚生労働省が来年度新規事業として予定している「若者自立塾」にチャレンジすべく、企画・検討が始まった。若者に象徴的に表れているように、「仕事」「就労」の価値を再構築すること抜きに、「新しい公共の創造」「市民・住民主体のまちづくり」は、生命と暮らしを後

退させていく。「協同労働」の普遍性が試される時が、間違いなく近づいている。だが、失敗や曖昧さが許されない恐ろしさも感じる。この恐怖と不安を超えられるのは、「連帯・協同」で編み上げられた「使命感」を鮮明にす

ることだろう。実りの秋に本物を手にしたい。そんな衝動がエネルギーを生み出す。そのエネルギーを新しい連帯の輪づくりに向けよう。いざ、長野へ！

研究所たより 研究所たより

9月25日(土)、東京都三鷹市のNPO文化学習協同ネットワークの「コミュニティ・ベーカリー風のすみか」がオープンしました。不登校の子供たちのフリースクールや自立支援を長く続けてきたこのNPOが、自らの事業としてパン屋を立ち上げるにいたった経過は、前号(No.146)の同NPO代表、佐藤洋作さん(当研究所理事)による巻頭言やNPOスタッフによる記事(No.130)など、「協同の発見」でも取り上げてきました。

オープン当日の夜には、記念行事として田中夏子さん(都留文科大)による講演も行われ、多くの青年、NPOの支援者、教育関係者などが参加して、盛り上がりました。フリースペースのスタッフからベーカリーの立ち上げの中心を担う浅野由佳さん(25)を中心に、専門家や地域の人たちの支援を受けつつ、自分たちのパンにこだわりを持って、若者が参加し働く実感をもてるようなパン屋を事業として成り立たせるというこの取り組みは、おそらく日本でも初めてのものではないか、と思います。

約2年前にこのベーカリーがプロジェクトとして始まった当初から、佐藤さんに声をかけていただいて、協同総研も応援団として準備の過程にも僅かながら参加させて

いただけてきました。2年という時間をかけて事業の準備を行うこと自体が、スピードと効率を要求される現代社会の中では、スローなものと言えるわけですが、その分、自分たちの納得と、可能な限りの手作りと、地域の中での理解を得ての出発であり、このような仕事こそがコミュニティに基盤を置く事業として、または「スローな働き方」(田中夏子)の実践の例として典型になるのではないかと思っています。

幸いなことに、事業としても店のロケーション(井の頭公園に面し、ジブリ美術館の向かいにある)もよく、マスコミ等での報道もあり、連日売り切れ状態にあるとのことです。お近くに行かれた方は、ぜひ寄ってみてください。(電話 0422・49・0466 メール center@npobunka.net URL= <http://www.npobunka.net/>)

ところで、若者の自立支援に関連しては、玄田有史+曲沼美恵『ニートフリーターでもなく 失業者でもなく』(幻冬社、2004年)という本が評判になっています。NEET(Not in Education, Employment, or Training)という概念は、もともとイギリスのものだそうですが、この本の出版によりマスコミでも盛んに取り上げられ、著者の

玄田氏はさまざまな講演やシンポジウムで発言をされています。

10月18日には、千葉のNPOニュースタート事務局の主催で「激論 ニートmeetsひきこもり」という玄田氏とNPO代表の二神能基さんのトークイベントがあり、参加してきました。二神さんは、「スローワーク」の提唱者であり、「ひきこもりは次代のリーダー」との持論をお持ちで、「レンタルお兄さん」や「若衆宿」「福祉雑居村」など、ひきこもり・大学不登校の支援ではユニークなプログラムを多くつくり出した、ある種のカリスマ的な存在になっている方です。このイベントの注目度も高いらしく、大雨の中にも関わらず大勢の方が参加していました。

全体として、ニートやひきこもりの原因は100人いれば100通りで一般化はできないものの、大人世代や社会全体の問題は明らかであり、社会の側からの何らかのアプローチが必要、との認識は一致しており、特に二神氏は玄田氏の仕事を高く評価されていました。

玄田氏の提言のひとつは、中学2年生(14歳)が地域の企業や商店、工場などで職業体験を行う、兵庫や富山で行われている取り組みを全国に広げる、というもので、確かに子供たちが親の働く姿を見ることがなく、なかなか「働く」ということにイメージを持ってない中で、世の中にはさまざまな仕事があり一見つまらない仕事の中にも、多くの人はやりがいや意味を見出して働いている、ということを経験する機会を増やすことには、一定の意味はあると思います。しかし一方で、そのような単調さも含めた地道な仕事を、多くの人が引き受け真面目に働いてきた結果が、現在のより競争的で効率や生

産性のみを重視する(としか思えない)社会が生まれ拡大してきており、若者の一定の部分(まさにひきこもる人たち)はそこに絶望を見ているのだとしたら、やはり大人世代はもっと違う価値観のアプローチをしなければなりません。

二神氏は逆に「ひきこもりこそが社会を変える」と言い切り、逆に自分たちがひきこまれる領域をさまざまに広げる活動をしている？わけですが、それはそれで、今の社会への深い絶望とあきらめがあるように感じます。

いずれにせよ、若者が「働く」ことへの支援、もしくは自立への支援は、日本ではまだようやく緒についたばかりで、国や自治体、学校もほとんど手を打っていないのが実情です。イタリアの社会的協同組合などの事例も参考に、協同組合セクターが何をできるか、三鷹のNPOとも関わりながら、追求していきたいと思います。 菊地 謙



2004年09月27日（月）

田中県知事と堀内ILO駐日代表と懇談しました。

午前中は、労協の現場として「ころぼっくるながの」、長野中央病院のビルメンや売店を見学し、長野医療生協の会議室をお借りして藤沢部長さんのご挨拶をいただき、田中知事との懇談の打合せを行いました。レストラン虹で昼食をとり、県庁1F知事室にて約40分間にわたり、協同集会の対談の内容について懇談しました。

知事選再選から2年目の折り返し点となり、知事は「コモンズ」をキーワードとした「信州ルネッサンス」や公約の取り組みについてふれながら、脱ダム宣言後の浅川ダムの対応や「オレオレ詐欺」などに使われている銀行口座の差し止めの実践などの具体的な成果や課題も話され、行政として行うべきことや、職員にも朝令暮改をしてでも前進していくことなどを求めていることなどが蕩々と話されました。

堀内さんから「ディーセントワーク」という言葉を聞き、「ディーセント」という言葉は自分も好きな言葉で、是非対談の冒頭でILOやディーセントワークを参加者に知ってもらうようビデオを10分ぐらい放映したほうが良い。と積極的な提言もしていただきました。

様々な資料や「信州知事 田中康夫」の名刺もいただき、小学生や福祉施設からの見学者には王冠をかぶってサービスする知事の姿も見られ、短時間でしたが、初顔合わせとしてはうまく終わることができました。

知事室を後にし、県庁2階で総括をし、善光寺を一周して帰路につきました。

協同集会 Web サイト 事務局日誌より (<http://kyodo-net/roukyou.gr.jp/2004/>)

2004年10月02日（土）

第6回実行委員会を開催しました

集会までの間の最後の実行委員会をJA長野県ビルにて開催しました。

参加申込状況は、10月1日の時点でほぼ1000人となり、県内参加者を倍増させなければならぬことから、申し込み締め切り日を10月15日に延長し、引き続き呼びかけを強めるため、全自治体訪問活動の継続、500団体への電話がけの分担、分科会報告者への訪問と宣伝、マスコミ関係への働きかけ強化などの取り組みを確認しました。

その他、交通費等の資金づくりのための「アルプスワイン」の販売、会場に飾る「短冊」の配布と協同への思いなどを記入してもらうこと、各実行委員会団体や報告者団体の映像や画像を10月11日までに届けていただくことなどを確認しました。

やまびこフォーラム in おぶせ開催

10/2～3にかけ、長野県の地域づくり団体が集まってやまびこフォーラムが小布施で開催されました。

田島さんからは、大わらじ委員会のビデオを上映し、200名近い参加者に、古代稲の田植えや過去の祭の取り組みなどを見てもらい、協同 in ながのの宣伝にもなり、交流会も懇親を深めあってよかったとの話しがありました。

山谷農場の藤田さんから、県の市町村課長やまちづくり支援室職員、小布施町長以下三役、議会議長、周辺自治体の助役の参加があり、協同集会の良い紹介の場となったとのメール連絡もありました。